

頁数 (P)	内容	チャート	疑問点・考察・感想
1~3	<p>【日本の長期金利】 ・304号で提示した、日本の10年債利回りの波動カウントを更新。 ◇インターミューディエット(5)の3波進行中説 ※長期金利のチャート表示方法について、算術目盛りかログスケールのどちらを採用すべきかという命題がある。日本の10年債利回りはマイナスの期間があるため、ログスケール表示されたチャートはエリオット波動原理による分析の対象にならない。 それ以前に、元来株価指数を分析対象としてきたエリオット波動原理には、分析の対象がマイナスの数値になるという前提がない。よって、実際にマイナスの数値が示現した金利も原油先物(WTI)も、そのチャートはエリオット波動原理では分析不可能である可能性も大いにあるだろう。ここではそうした可能性にも留意しながら、あくまで挑戦的な試みとしてエリオット波動原理による金利の分析を行っている。</p> <p>◇インパルスのプライマリー③進行中説 を更新 ・つまり、日本の長期金利は1.2%を僅かに超えた辺りで③波の終点に到達し、その後は④波によって長期間の横ばいの動きになるという想定である。</p>	日本の長期金利	<p>【疑】日本の10年ものの国債利回りについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・金利が上昇すると、将来の利払いが増えていく。利払いが増えれば、政策に使うための経費が圧迫される恐れがある。 ⇒政策の決定に影響がある。 ・10年の国債利回りは、長期金利の代表的な指標とされており、住宅ローンの固定金利や企業向けの貸し出しなどの金利を決める基準になっている。 ・そのため、家計に対しては住宅ローンの金利が上がり、負担が増えることになる。一方で、定期預金の金利が引き上げられる可能性もある。 ⇒銀行が優位。 ・生命保険では、契約者に約束する「予定利率」が引き上げられることも見込まれ、契約者が受け取るお金が増えたり、保険料が安くなったりする。 ⇒保険会社が優位。 ・企業については、資金調達コストが増え、設備投資が難しくなる。
3~6	<p>【日米の長期金利の差とドル円の関係について】 ・両者のチャートを重ねて表示すると明確な相関が確認できる。つまり、日米の金利差が円安の主要な理由であることがこのチャートで証明できるということになる。 ・ところが、5月3日以降は両者のトレンドが反対を向いている。こうした逆相関の動きがいつまで続くのかは、またそのような動きになった理由は、残念ながらエリオット波動原理によるチャート分析では明らかにすることは困難だ。ただ、F2で提示したカウントをベースにすると、両者が逆相関の動きになったのは、金利が(5)の3の(v)波に入ったタイミングだということになる。 ・それ以降、金利は2011年以来という1%超えの水準にまで急騰した。その過程で日銀の財務に対する警戒感を材料に投機的に円を売る動きがあったことが「逆相関」の原因であるという想像はできるものの、本当の理由は分からない。</p> <p>【米国長期金利】 ・前号では、米国長期金利の波動カウントに関し、優位性が高いと見られる3つのパターンを提示した。その後の動きにより、シナリオ1、2は、金利が反転上昇したことにより、カウントが無効化レベルに近づきつつある。ただし、シナリオ2は5波部分を拡大型ダイアゴナル形成中とカウントすることも可能であろう。 ・シナリオ3は、4波トライアングルの(e)波が短く終わったと認識することが可能であるが、日本の長期金利はログスケールで表示できないのに米国長期金利はそれができるという合理性に欠く仮説を持ち出さなければならないことになってしまう。 ・これらのことを考慮すると、仮に金利が上方に抜けていった場合には、F11に提示したシナリオ2の別バージョンがメインカウントとなるであろう。それは、間もなくコロナ安値を始点とするインパルスが完成するという点で、F5に提示した日本の10年債利回りのカウントとも整合的である。</p>	日本の長期金利、ドル円、米国長期金利、	<p>【疑】F4の①波の始点(2016年7月25日)は、何があったのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016年1月に「マイナス金利付き量的・質的金融緩和」が導入。 ・日銀の誘導目標の下限が-2.0。 ・6月23日の英国の国民投票でEU離脱がきまり、リスク回避。 <p>【疑】F4の②波の始点(2019年9月2日)は、何があったのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年7月31日のFOMCでは、アメリカの政策金利を0.25%引き下げて、年2.00~2.25%に変更(10年7カ月ぶりの利下げ) ・米中の貿易摩擦が和らぐ ・2019年10月1日消費税率が8-10%へ増税。
7~12	<p>【ドル円①】 ・323号で提示した3つのカウントパターン(A~C)を提示したが、現時点での波動状況を基にゼロベースから再考察を試みたい。</p> <p>・まず、再確認しておきたいのが、2023年1月ボトムから11月高値までの波形である。この部分は、ダイアゴナルもしくはトリプルジグザグのいずれかと認識できるというのが、詳細な波動カウントから導き出された結論である。 すなわち、 パターンAおよびパターンC ⇒ トリプルジグザグ パターンB ⇒ エンディングダイアゴナル …この検証を行う。</p> <p>(パターンA) ◇5波ダイアゴナルの(iii)波形成中 ・つまり、スラストである5波がダイアゴナルを形成中という想定である。 ※5の(i)波部分は、ジグザグとカウントできるが、いくつかカウント案がある。ただし、インパルスとカウントすることはできない。 ※(ii)波始点を割ると、無効化となり、パターンAの優位性は大きく後退する。</p> <p>(パターンB) ◇フラットのB波ダブルジグザグ完成後、リーディングダイアゴナル 進行中説 ・拡大型フラットにおいて、B波の大きさがA波の何倍まで許容されるかについての明確な指針はないため、さらにB波が上方に伸びていく可能性が絶対には言えないが、すでにB波がA波の1.69倍というガイドライン(1.618倍)近いこと、ダブルジグザグが出現していることを鑑みれば、すでにドル円は天井を付けたと考えるのが自然。</p> <p>【ドル円②】 (パターンC) ◇5波ダイアゴナル形成中説 ・ダイアゴナルにおいては、(i)波と(iv)波が重なることが原則となっていることを勘案すれば、仮に現在の波動がダイアゴナルの途上であるなら、そのダイアゴナルは拡大型になると想定するべきであろう。 ・F22において、(iv)波の一つの案として(B)波フラットのジグザグ説を提示しておきたい。</p>	ドル円	<p>【疑】ドル円の大口は誰なのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・為替市場の参加者は多種多様。 <p>■投機筋 ・為替変動を利用して、為替取引そのものから利益を得ようとする組織、人のこと。代表はヘッジファンド。 ・銀行等の金融機関も為替差益を得るために取引を行う場合は、投機筋に該当する。 ・投機筋は、短期で頻繁に売買するのが特徴。</p> <p>■実需筋 ・経済活動を行うにあたって、国境を越える決済の必要性から為替市場に参加している組織や日とのこと。 ・輸出入企業、顧客の注文に応じて金融機関が行う為替取引もこれにあたる。 ・為替相場に関係なく、買ったらいっぱなし、売ったら売りっぱなしであるため、為替需給に影響を与えるのが実需筋。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貿易収支が黒字であれば、その国の通貨の価値が高くなる。 つまり、 貿易収支が黒字⇒円高圧力 貿易収支が赤字⇒円安圧力

12~20	<p>【225CFD①】 ・リーマンショック後安値以降のメインの波動カウントの提示。 ◇サイクル級フラット(A)の(C)波進行中説 ◇サイクル級フラット(C)波進行中説 ※リーマンショック時のチャートを合成すると進行想定が一致。 ・F24、25のように波動が進行するとすれば、今後リーマンショック級のリスクイベントが発生することを意味している。換言すれば、それくらいの出来事が起こらない限り、このような想定は実現しないということになる。</p> <p>・2003年5月から2007年7月まで(リーマンショックの前)の上昇波動はダブルジグザグとカウントできる。 ・F24における(B)波のメインカウントもダブルジグザグとなっている。 ・さらに、(B)波のY波部分は、ジグザグが完成したとカウントできるのが現時点の見解である。(3月22日高値である41,150円を超えた時点でF30のカウントは無効化する) ・ただし、F29におけるYの(c)波がダイアゴナルを形成した場合は、F29のカウントは維持される。 ・また、F30における(C)の4波がチャンネルからはみ出して過大に修正した可能性が絶対ないとも言えない。 ※しかし、F33またはF34で提示した動きよりも株価が大きく上方に展開していった場合には、F24やF25に提示したサイクル級の波動カウントから見直す必要に迫られるであろう。</p> <p>【225CFD②】 ・前号では、3月22日高値以降の動きに関してリーディングダイアゴナル進行説をカウント案の1つとして提示した。そのカウントを更新。 ◇リーディングダイアゴナルの(ii)波ダブルジグザグ説 ◇リーディングダイアゴナルの(ii)波完成説 ◇リーディングダイアゴナルの(ii)波ランニングフラット説 ※ランニングフラットが出現するのは、メジャートレンド方向の力が強い時というガイドラインがある。</p> <p>・また、株価がF39((C)の4波がチャンネルからはみ出して過大に修正したインパルス説)の4波終点を割らない限り、このカウントは無効化しない。 ・現時点のメインカウントは、リーディングダイアゴナル(iii)波進行中説である。</p>	225CFD	<p>【疑】リーマンショックとはなんだったのか</p> <p>・リーマンショックの本質は、「そんなこと起こるわけない」と思っていたことが起きたことによるパニック(集団心理)。</p> <p>・FRBや他の金融機関がリーマンブラザーズを救済できる、見捨てないと予想されていたが、それに反して破綻してしまった。もしかしたら、他の金融機関も危ないかもしれないというパニックが起きた。</p> <p>・背景には、アメリカの住宅バブル(政策的に住宅を購入しやすくしていた)崩壊があり、住宅市場の悪化によるサブプライム住宅ローン危機が発生。</p> <p>・債券を沢山抱えていた金融機関に飛び火し、財務状況の悪化につながり、増資したり、破綻する銀行が出てきた。</p> <p>・投資銀行のリーマンブラザーズが2008年9月15日に経営破綻し、そこから連鎖的に世界金融危機が発生した。</p> <p>・その後も金融不安は収まらず、株価は下落を続ける。世界的な不況が訪れたが、最終的には世界中で金融緩和を実施し、翌年の3月ようやく終息した。</p> <p>⇒もし、金融緩和を実施しなかったら、もっと大きな下落になったのではないかな？</p> <p>そして、それが本来あるべき姿だったのではないかな？</p>
21~24	<p>【S&P500】 ・前号で提示した、昨年10月安値からのS&P500とナスダック100の波動カウントを再確認。 ◇ダブルジグザグのYの(a)波進行中説(S&P500) ◇ジグザグのC波完成間近説(S&P500) ◇ジグザグの(c)波完成間近説(ナスダック100)</p> <p>・仮にここまでのカウントが正しければ、S&P500とナスダック100は共に来週初めに天井に到達し、下落に転じることになる(ただし、Cとラベリングした波動が、Cの(i)波に過ぎない場合はこの限りではない)。</p> <p>【225CFD】 ・一方、225CFDの直近の波動は、ダブルジグザグを形成中とカウントできる。(5分足) ・上記のダブルジグザグは、下向きのリーディングダイアゴナル(iii)波のうちwの◎波の(2)波とカウントすることも可能であろう。 ・もしくは、下向きのリーディングダイアゴナル(iii)波のうちa波進行中とカウントすることも可能。これが現時点での225CFDにおけるメインカウントとなっている。</p>	S & P500、225CFD	<p>【疑】今、世界に存在していて、国が救済を保障するから、絶対起こりっこないと思っているバブルは何なのか？</p> <p>・日本の国債 ・日本版の住宅バブル(住宅ローン債権)</p> <p>・ただ、これは世界中の金融機関が日本に投資していることが前提。</p>